

正五年甲申二月二十五日感疾泊然而化。壽八十一。本能寺今復云勝劣。弗師之志。兒孫之過云々。とあり。また日隆の叔父京兆妙蓮寺日存。日純二上人傳に云ふ。二師者越之中州人。姓者源氏。桃井左馬頭尙儀之弟。兩弟同志。窃出塵網。走投于龍華霽公之室。兄呼精進房日存。弟呼好學房日純。應永十二年乙酉。霽公喪。不幸親炙日淺。霽公在世至孝竭誠。霽公亦鍾愛殊他矣。然吾宗學業不詳。本迹勝劣之判。難通一貫之理。是以像尊者每言。一往勝劣。再往一致。霽公欲令二子從著至微。不越其級。以遂晚成大器之功。故先授漸次一往教。未及秘盟別付之日而逝矣。故存純二師。唯知有勝劣。不識一致之奧。勸詰法兄月明僧正。僧正哀之。時々死之不可。偏信法執擬爲痼疾矣。像尊在世。有柳屋妙蓮。深信優婆夷。別稱淨室。時請像尊。其室未廢。兩師幸得之擬寺。別處兄弟齊志。彌寡勝劣之執。有年于茲。一時豁然通會。兄弟討論謂。先師勝劣之說者。中止一城大慈手段也。先師冥助歟。僧正慈善根力歟。一時兄弟身意泰然。快得安穩。相共走而謝僧正。僧正亂其所解。大喜而曰。今法王大寶自然而至優曇華乎。猶恐後之魔障。三寶祖師前

造告文。兩師喜書之。其文曰。抑矣我等倒惑。依于迷一往勝劣手段不。知有再往一致之口授。損自損他。其暴惡積存于存純之身。冥慮之恐甚銘肺肝。今懇悔謝。枉垂大悲。重存異端者。法華經中三寶諸天十女番神。殊高祖大菩薩。歷代祖々冥罰不輕。失現當二世之勝利。永可留無間地獄。仍起諸文如件。應永二十一年十月二十五日精進房日存花押。好學房日純花押。是告文今遺傳於馮兩師改志。行業積年。造營振力。殿堂成就。勝呼楊柳山妙蓮寺。崇像尊爲開山。大覺朗。源日霽爲歷代。日存居五代位。日純居六代位。存者應永二十八年辛丑三月二十六日化。純者後改日道。應永三十一年甲辰四月二日化。法弟桂林房日隆。慧光房日眞猶無發明。凝滯勝劣。後過五年。隆者發明。謝牒如傳。眞者彌走異路。本門八品之外不誦其餘。別築本隆寺。唱揚異教而終焉。其裔迄今樹旗滔々。嗚呼一念之微可不慎乎。兩師至信。痼疾平癒。謝怙可見。故今系于正傳。とありて、桃井尙儀一族叔父・甥三人共に法華宗に歸依して、殊にその宗門の奥義を究め、寺院を創立なしたり。

○日隆上人出生地傳話

越中國射水郡淺井郷島村は、日隆上人の出生地にて、此地にて誕生ありと云傳へたり。寶永元年舊蹟書に、射水郡淺井組嶋村に、番神堂と申して寺屋敷跡に小堂昔年より有之。此の寺跡は日蓮宗中古之祖師日隆上人誕生地にて、應永廿三年日隆建立有之本光寺と申す寺跡にて、只今番神堂は高岡本光寺より萬事支配任。とあり。番神堂縁起に云ふ。淺井郷嶋村本光寺番神堂開基日隆上人。幼名長一丸。俗姓桃井氏。人皇五十六代清和天皇の苗裔、桃井義胤九代の孫、越中の領主桃井右馬頭尙儀の二男なり。母は攝河兩國の領主斯波義將の女なり。鎮護八幡宮の神夢を蒙り、種々奇瑞有りて既に誕生す。幼時より常に出家の志ありといへども、父母之を許さず。七歳にて京都に登り、學頭妙顯寺の弟子と成り、深縁と稱し、十八歳にて攝河兩國暨び九州に到り、普く衆生を度す。折節攝州尼ヶ崎の城主細川右京大夫招請之、頗る奇特ありて感不凡、大に歸依す。則城中の八幡宮の社地を深縁日隆上人へ寄附す。依りて此地に本興寺を創立す。是弘法最勝の本寺なり。三十七歳にして歸京し、本能寺を創立あり。其頃上人の舍兄、本國越

中の領主桃井直之病に罹りて歿せらる。因茲老臣本成上京して、家名相續の爲め還俗の事を懇願す。上人之を聞いて謂て曰く、弘法專にして何ぞ還俗すべき乎。本成歎じて曰く、家中中村元助既に企反逆、欲押領主家。哀哉我老衰して防之力なしと。上人其願末を聞糺し、本成が忠信雖堪感、中村元助が逆心濁世通途の業なり。如何んぞ爲是再び殺伐を事とせん乎。然れども父祖の遺跡全からん事、是又孝の道なれば、不征んはあるべからず。依之軍兵爲催促對忠臣染一翰。汝本國に歸り可計之と理解して宣へば、本成も承服し、重て謹言して曰く、凡そ戰諍は將帥なくては士卒迷塗、得勝利甚難しとす。此儀如何と申す。上人此言を聞きて本成が申分尤なりとて、立鏡彫刻自像。其像有髮の武將甲冑を帶し、紫の頭卷に金の采配を採り、弓を手に持ち長刀を帶し、惡魔降伏の形相なり。以是將帥となし可征伐。必得勝利無疑と宣へば、本成頂戴之、急ぎ越中へ歸國し、士卒を集め件の願末を披露して、親翰尊躰の肖像を披見せしむ。諸士卒皆力を得て勇氣を引立て、不日に彼の逆臣元助を征伐するに、元助一戰に失利、悔前非自害し、一